

第2回新銳俳句賞

正賞

『生家』

町田無鹿

# 生家 町田無鹿

馬跳びの馬連なれり春の草

束にして土筆軋みぬわが手中

花冷の聖書くたりとひらきけり

花筵灯およばぬ一隅も

泣きやまぬ足下落花ふきだまる

菜の花や父の小さきオートバイ

百千鳥みるみる髪の結ひあがる

枕絵をうづめ踊字うららけし

断崖の沖かがやける薊かな

夏兆すプリマの胸のたひらかに

絵はがきの粗き漉き目やみどりの夜

敵七人あり蚕豆の莢ねぢる

かをりたつ香水怒り激しければ

蛍見の草踏みしだかれて匂ふ

恍惚と花粉まみれや黄金虫

てのひらに融かすワセリン夜の秋

茄子の馬に手綱つけくれよと祖母は

棒四本立てて陣地や草の花

木犀や指もて均すタルト生地

薬草園巡回腰に鍵束冷え

小鳥来る紅あざらけき殉教図

教会の裏口灯る時雨かな

旅客車に眠るふたりや桃青忌

海鼠腸やパトロンにして女弟子

よき古書肆あればよき町八手咲く

生家遠し聖樹に綿の雪降らせ

息白く時折東京を憎む

冬ぬくし人語解する犬とゐて

校塔に金の校名春隣

書架に足す棚板ひとつ春立ちぬ